



映画に  
宛てた  
ラブ  
レター

2016・3月号

天見谷行人

## ブラックス・キャンダル

---

ブラック・スキャンダル

2016年2月13日鑑賞

人はなぜ「悪」に魅せられるのか？

この作品に出てくる登場人物「ほぼ」全員 “悪人” なんですね。

このキャッチフレーズ、どっかで見たこと、聞いた事ありませんか？

そうです、北野武監督の[「アウトレイジ」](#)

あれですよ、あれ。

本作を鑑賞中に「デジャヴ」を感じたのは、そこなんですね。

おそらくスコット・クーパー監督は「アウトレイジ」を見たことでしょう。

作品全編に漂う雰囲気や、絵作りの構図、アート感覚が、ちょっと似ているんですね。

タイトルにある通り、本作はまさにブラック映画、暗黒映画といってもいいです。

そういう「フィルム・ノワール」の秀作としましては、以前劇場で鑑賞した

[「あるいは裏切りという名の犬」](#) が挙げられますね。

あれはよかったですよ。劇場出る時なんか、もう自分はギャングになった気分でしたねえ。

さらには、デンゼル・ワシントンさんが主演した[「アメリカン・ギャングスター」](#)

これも最高でしたねえ。

さて本作なんですが、こう言ったギャング物の作品たちの中で、どういう位置づけをしましょうか？

一歩間違うと、かつての秀作、名作ギャング映画と、同じような内容の、単なる焼き直しに見えてしまう恐れがあります。

ただ、本作は実話を元ネタに制作されていますね。

そこが他の、フィクションとしてのギャング映画と、ちょっと違うわけです。

ただ「アメリカン・ギャングスター」も実話ベースのお話でした。

ここで監督の腕の差というのが出てくるんですね。

「アメリカン・ギャングスター」は、リドリー・スコット監督の作品です。

本作の監督、スコット・クーパー監督も、かなり腕の良い映画監督であることは間違いありません。

本作を見てまず注目すべきは、男優さんたちのキャラ、存在感が際立っていることです。

主演のジョニー・デップはもちろん、脇を固めるジョエル・エドガートン、ベネディクト・カンバーバッチ、など

特にジョニー・デップの演技。これは特筆すべきものでしょう。



知性がありながら、圧倒的な冷酷さを併せ持つ人物。

「ヤクザ・ビジネス」その商売人としてのセンスが抜群。努力も惜しみません。よく働くんですね、この人。

いったい、この人物はどういう人間なんだろう？

これだけの努力を惜しまないなら、真っ当な起業家としても、ちゃんと成功しただろうに……と思えるんですね。

物語の舞台は1970年代、ボストンの南町です。

主人公のジェームズ・バルジャーは弟のビリーと共に、貧しい街に生まれました。ビリーは、後に政治家となります。近所の幼なじみ、コノリーは、なんとFBIの捜査官となりました。

ジェームズ・バルジャーは、街のチンピラから身を起こし、麻薬密売などで、ぐんぐん頭角を現して行きます。

そして弟のビリー・バルジャーは政治家としての階段を、トントン拍子に登ってゆきます。

この「ギャング」と「政治家」と「FBI」

全く立場の違う三人が、固い絆で結ばれ、それぞれの地位と権力「金」をめぐり、完全な運命共同体として、行動して行く事になるのです。

ギャング映画の主人公は、もちろん圧倒的な「悪いヤツ」なんですよ。

だけど悪い奴って、なんでこんなに人間的に魅力的なんだろう？

なんでこうも、人を引き込む魅力があるんだろう？

だからこそ主人公の周りに、いろんな人物が磁石のように惹きつけられるわけですね。

こういう構図が、ギャング映画の、ある意味「お約束」みたいな感じに私には思える訳です。



監督自身も、きっとこの悪役の主人公、人物像に、惚れ込んだからこそ、映画を作ろうと思ったのでしょう。

それは北野武監督然り、リドリー・スコット監督しかり。

きっと「ワル」で「ダーティー」なキャラクターに愛着を感じている。

本作ではもちろん、残虐な暴力や殺人のシーンもあります。

だけど残酷な暴力シーンを見せるために、ギャング映画はある訳じゃないんですね。

あくまでも自分の組織を守るため。

自分の家族を守るため。

そして自分の地位と名誉と財産、あらゆる権力を守るため。

そこに人間の深い深い性分と言うものが、見え隠れしてくるわけですね。

ギャングというのは、冷酷で非常で、情け容赦ない、極悪人にまちがいない。

だけど、その原動力は実に人間臭い「欲望」なのですね。

結局、彼らも欲望の前には勝てない。

その時に観客は、彼らギャングも、結局ただの「弱いひとりの人間」に過ぎない、と言うことに気づかされるんですね。



その人間臭い人物像を、ジョニーデップが深く、怪しく、ふてぶてしく演じています。

かつては「[パイレーツ・オブ・カリビアンシーズ](#)」において、ジャック・スパロー船長と言う、愛すべき、呑みだくれ船長、というキャラクターを演じました。みんなの人気者になりましたね。

まさか、その人が、こんな一見、氷のように冷たく、非情な人物像を演じきった。

それこそが、この作品を見る価値があると僕は思います。

ジョニー・デップの演技の重厚さ、そして奥深さ。

それが味わえる一作となったのではないのでしょうか。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 スコット・クーパー

主演 ジョニー・デップ、ジョエル・エドガートン

製作 2015年 アメリカ

上映時間 123分

[「ブラック・スキャンダル予告編映像」](#)はこちら

## オデッセイ

---

オデッセイ

2016年2月25日鑑賞

火星で生き残る●●な方法

火星旅行も今や夢物語ではなくなりました。そういう中で出てきたのが本作「オデッセイ」です。

とある事故のために、火星に1人置き去りにされた宇宙飛行士の話です。

監督はリドリー・スコットさん。

植物学者マーク・ワトニーは宇宙船に乗り込んで、はるばる火星までやってきました。

そこで仲間たちと調査中、大きな砂嵐に遭遇。彼だけが吹き飛ばされてしまいます。交信は途絶。生命反応なし。

船長とNASAは、やむなく彼を死亡したものとみなします。

そこでミッションは中断。

宇宙船は火星を離れ、地球への帰還を目指します。

しかし植物学者マーク・ワトニーは生きておりました。

いくつもの偶然が重なり、彼は奇跡的に助かりました。

しかしマークが気がついた時、すでに仲間は宇宙船とともに、地球へ向けて帰路についている最中です。

火星という、荒れ果てた茶褐色の地表の上、マークは、たまたま人類という「一個の生き物」として取り残されてしまいました。



火星には既に実験棟がいくつか建てられています。

その中のひとつに彼は避難します。幸い実験棟は電気も酸素もありました。

体の治療をし、彼は残った水と食料をかき集めてみます。

次に火星にやってくる探査機は四年後。

食料はあと31日分です。それに水も全く足りない。

人間、「火事場の馬鹿力」とでも申しましょうか、可能性が1パーセントでもあるなら、生き残れる方法を考える。1日でも長く生き残る方法は何か？

それを考えるわけです。

彼は植物学者です。

そうだ、火星で植物を育てよう。

ちょうど、じゃがいもがありました。

じゃがいもの種を植えます。

しかし火星の砂地では、とてもじゃないが植物は育たない。

ではどうするか？

肥料と水が必要なんですね。

まあ、肥料と言えば聞こえはいいですが、要するに排泄物。

ズバリ言えばウンチとおしっこです。

幸いにもその「備蓄」は嫌というほどありました。

彼は真空パックされたその「排泄物」を一つ一つを開けて、水と合わせて「肥料」を作るわけですね。

全くもって「ビッチな作業」なわけですが、まあ生きるためです。

その後、彼は水を作る事にもトライします。

作業の際、彼はモービルと呼ばれる車を動かすんですね。

ある日、地球のNASAが、火星の地表で、モービルが行ったり来たりしているのを偶然発見します。

もしかするとマークは生きている？

NASAのスタッフは騒然となります。

しかしマークと通信ををする手段がないのです。

火星にいるマークも、なんとか通信手段を確保しようとしています。

そして見つけたのが、もう使用済みの、かつての無人探査機

「マーズ・パスファインダー」

この機械の中には通信回路があります。これを生き返られせば、通信できるかもしれない。

彼のチャレンジは、次から次へと続きます。

マークは、はるか遠く離れた地球へ、無事に還る事ができるのでしょうか？

という訳で……

一時期リドリー・スコット監督は、超大作ばかり撮っていた時期があります。

やたらと大勢の群衆を登場させる。太古の神話みたいなものを、とても大げさな演出で撮る。

そういう作品群の予告編は、見ているだけで、もう胸焼けがするほど、満腹感いっぱいでした。

僕はしばらくの間、リドリー・スコット監督作品を避けていた時期がありました。

大勢の群衆を動かす快感に、監督自体が酔ってしまっている、中毒症状ではないかな？と感じていました。

そんな中で、ようやく良いなと思えたのが「[アメリカン・ギャングスター](#)」という作品。

デンゼル・ワシントン演じるギャングの親玉と、ややダーティーな警官役、ラッセル・クロウの、がっぷり四つに組んだお芝居。

これは見応えがありました。

以前の超大作なんかよりよっぽど迫力があった。

「アメリカン・ギャングスター」では、2人の役者にフォーカスが当たっていました。

本作では、マット・デイモン演じる、植物学者で宇宙飛行士、マーク・ワトニー。ほぼ、彼の一人芝居が、作品の重要な鍵になります。





本作では、大きく分けて3つの舞台設定があります。第一にマーク一人が取り残された火星。第二にマーク以外のチームを乗せた、地球に向かう宇宙船。そして地球上のNASAとスタッフ。これらの舞台を組み合わせる事により、観客を飽きさせない、巧みな工夫がなされており、地球以外の星に取り残されるという設定。そこで忘れる事ができない作品があります。

「月に囚われた男」という秀作です。

低予算で、いかにメジャーに負けない、面白い作品を作るか？

その心意気、と言いましょか、私はこの作品のレビューで

「お見事、あっぱれだ！！」と褒めちぎった覚えがあります。

メジャー映画が取り上げる手法として、ベストセラー原作の映画化、そして有名俳優と有名監督、こういった要素があれば、多くの予算を獲得する事が可能でしょう。

しかし、「月に囚われた男」は、低予算、マイナーな作品にもかかわらず、予算をふんだんに使った大作に負けず劣らず、面白いのです。おそらく、リドリー・スコット監督は「月に囚われた男」を観た事でしょう。

マット・デイモンの一人芝居をもっと観客に見せる、という演出手法もあったでしょう。

ただ、その場合、「月に囚われた男」の焼き直しか？ という疑問も出てしまいます。そのあたりをよく分かった上で、バランスよく、3つの舞台を交互に見せてゆく。そういう手法で、本作は独自色を出す事に成功しています。

様々な超大作をこなしてきたリドリー・スコット監督ならではの、の演出ではないかと思います。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 リドリー・スコット

主演 マット・デイモン、シェシカ・チャスティン

製作 2015年 アメリカ

上映時間 142分

[「オデッセイ」予告編映像](#)はこちら

## クーパー家の晩餐会

---

クーパー家の晩餐会

2016年2月29日鑑賞

演出がすでに崖っぷち？晩餐会

映画の主題となるクーパー家。この一家、色々と問題を抱えています。お父さんサムと、お母さんシャーロットは、ほぼ離婚確定。そんな中、年末最大のイベント、クリスマス・イブがやってきます。おそらく、夫婦二人で迎える最後のクリスマス・イブ。

言い換えれば「最後の晩餐」……なのかもしれない。

娘、息子たちやおじいちゃん、孫たち、一家全員が集まってくる。

娘エレノアは、クリスマス・イブなのに彼氏もいない。親を安心させたい気持ちもあります。

そこで空港で知り合った、若いイケメン軍人を、即席パートナーとすることにして、パーティーに強引に出席させてしまいます。

息子ハンクは、妻と離婚。さらにはリストラされた事を、家族に内緒にしています。新しい就職先はなかなかみつからない。3人の子供達もいるのに、ああ、どうしよう。

母、シャーロットの妹で、遅刻魔のおばさんエマ。この人、ストレスからか、万引き癖がある。大切なクーパー家のクリスマス・イブの日に、こともあろうか、万引き現行犯で手錠をかけられてしまいます。

母方のおじいちゃん、バッキーにいたっては、行きつけのカフェ、お気に入りのウェイトレスを誘ってイブのパーティーに出席。まあ、この歳になると世間体など気にしなくてもいい。怖いモンなし。

一見なごやかなクリスマス・イブのパーティーなのですが、もう「ウソ」と「虚飾」に溢れかえっていて、ガラス細工のように危うい。

ちょっとバランスを崩せば、あっという間にガシャガシャッと壊れてしまう、そういうパーティーが進行していきます。



本作の予告編を見た時から、「こりゃ掘り出し物を見つけたぞー」的な高揚感を感じました。前評判は全然高くないのに、いざ観てみたら「めちゃくちゃ面白い」と言う作品を発掘するのは、映画ファンにとっては、それこそ「極上の楽しみ」の1つです。

こういう作品は自分なりに「発掘したぞ」という達成感があって作品に愛着がわくものです。きっと本作も”そういう映画に違いない”と僕は、いそいそと映画館に向かいました。それでもって結果。

当たりか、ハズレか？ と聞かれれば、まあ、残念ながら「ハズレ」としか言いようがない。まあ、しょうがないです。

本作で印象的だったのは、実力派の役者さんを多く使っている事。

万引き癖のある、おばさん役にマリサ・トメイ。

パトカーで護送される途中、逮捕した警官相手に、巧みな話術で、相手を翻弄してゆきます。この車中での二人芝居。これは見事でしたねえ。

クーパー家のお父さん役にジョン・グッドマン。

デンゼル・ワシントン主演の「[フライト](#)」では、薬の密売人を演じてましたね。

真っ黒なサングラスに、突き出たお腹とアロハシャツ。様々な薬を詰め込んだバッグを抱えた姿は貫禄十分。

怪しい薬を売りさばく、濃厚なキャラクターを演じていました。

その人が本作では、一転して、実に人の良さそうな、中流階層のアメリカ人パパを演じています。

アマダ・セイフライドも、本作では、ちょっと憂いのある演技がよかったですねえ。



彼女は「[テッド2](#)」で、若いおねーちゃん弁護士役で出演してましたね。本作ではカフェの店員。そこに通いつめているおじいちゃんがアラン・アーキン。  
このおじいちゃん、彼女にいろんな映画を紹介するんですね。  
本作ではそこで、チャップリンの「[街の灯](#)」のラストシーンが、そのまま使われてたりします。

監督のチャップリンへの敬愛の念が表されていますね。

このおじいちゃんとアマンダ・セイフライド演じるウェイトレスとの間柄。

まあ言ってみれば、チャップリンの晩年の傑作「[ライムライト](#)」のモチーフと言えなくもない。  
その辺り、相当意識してると思います。

クリスマス・イブの夜、一年に一度の特別な日。そのディナーに集まる家族。

「ウソ、偽り」を内面に抱えながら、表面上は、何食わぬ顔で、クリスマス・イブをお祝いするというモチーフ。

これは決して悪くないです。

脚本さえうまくいけば、相当いいネタになる可能性があります。



本作で気になったのは、登場する家族の人数が、ちょっと多すぎたんじゃないかな？ という点ですね。登場人物をもっと絞っても良かった感じがします。

本作の上映時間は107分です。2時間ないんです。

その中で、クーパー家の当主であるお父さん、お母さん、おじいちゃん、それからおばさん、娘とその彼氏。離婚した息子夫婦とその子供達。おまけにカフェの店員まで登場。

これらの関係性を107分の中に、全部詰め込もうとすると、どう考えたって一人当たりに割ける時

間が限られてしまいます。

そういう面でも、ちょっと無理があったんじゃないか？ という気がいたします。

できればパーティーの真っ最中から映画を始めてみる、と言うのも一つの手手段だったかもしれませんがね。

そのパーティーが進行する会話の中で、徐々に「お互いの本当の関係」「本音とウソ」がバレそうになる、そんなブラックユーモア的なコメディ、脚本・演出にする手法もあったかと思えます。

そのあたり、ウディ・アレンなら上手く描くだろうな、と思いました。

あるいは、[「ユー・ガット・メール」](#) のノーラ・エフロン監督や、[「マイ・インターン」](#) や [「ホリディ」](#) を撮ったナンシー・マイヤーズ監督が、もし本作を手がけていたら……。きっと、あんな風に撮っただろうな、こんな風に撮っただろうな、などと想像してみるのも、映画好きのお楽しみですね。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 ジェシー・ネルソン

主演 ダイアン・キートン、ジョン・グッドマン、アマンダ・セイフライド

製作 2015年 アメリカ

上映時間 107分

[「クーパー家の晩餐会」予告編映像](#)はこちら

海難1890

2016年2月15日鑑賞

奇跡の絆が時代を超える

本作は大きく分けて2部構成になっています。

1つは1890年、和歌山県串本沖で起きた、オスマン帝国の「エルトゥールル号」遭難事件。もう1つは1985年イラン・イラク戦争における、テヘランからの、日本人救出劇です。この時トルコ政府が旅客機をチャーターし、日本人を救出したのです。

本作は日本・トルコ友好125周年を記念して製作されました。

明治23年（1890年）トルコの親善使節を乗せた「エルトゥールル号」が和歌山沖で嵐に会い、座礁。船は大破してしまいます。乗組員は600名を超えていました。そのうち500名以上がこの遭難で犠牲となってしまいます。

この遭難事故を真っ先に見つけたのが「檜野崎」（現在の串本町）と呼ばれる、和歌山南端の小さな小さな漁村の人たちでした。

当時としては、世界最大規模の海難事故であったそうです。

小さな貧しい漁村の目と鼻の先で、そんな大惨事が起ころうとは。

まさか?!の事態です。

とにかく、村人たちは必死で救助にあたります。

そこで彼らは更に驚いてしまうのです。

「異人さんや!!」

開国したニッポンとはいえ、地方の貧しい漁村では、外国人を見るのは初めて、という人も多かったでしょう。

明治という、まだ生まれたての国家は、急速な近代化を図っていた時期です。この漁村にも、郵便や、新聞、それに軍人などから、新しい首都、東京のニュースは伝わっていました。

トルコの親善使節を乗せた「エルトゥールル号」が、大役を果たし、帰途についているという報道はこの和歌山の寒村「檜野崎」にも伝わっていたのです。

村人たちの目の前に起きたのは、まさにそのエルトゥールル号の遭難。

この村には、ちょっと変わり者の医者が住み着いていました。



田村元貞、という元紀州藩士です。

この医者、貧しい人からは、治療費を受け取りません。

村にとっても、遭難した乗組員たちにとっても、この医師、田村がいてくれたことがまさに奇跡でした。

冷たい海から引き上げられ、次々に運ばれてくる乗組員たち。

助ける！

とにかく、一人でも助ける！

ここで、田村は冷静な判断を下します。

いわゆる「トリアージ」を行うのです。

助からない者、重傷者、軽傷者、を分ける。

そして、重傷者から先に手当てしてゆく。まさに命の選別をする。

乗組員の体は海に浸かり、冷え切っています。

「火を起こせ！ 湯を沸かせ！！ 粥を作れ！」

村の女たちも総出で救助を手伝います。

村長（笹野高史）は村人たちを集め、緊急の寄り合いを開きました。

「すまんけど、人助けだ。少しでもいい、米を出してくれないか……」

貧しい漁村は、普段でも食うや食わずです。

遭難した乗組員の食糧調達は、村にとって、極めて大きな負担でした。

しかし、村人たちは皆、唇を噛み締めて、村長の意見を聞き入れました。

こうした懸命な救助によって、トルコ人69名の命が救われました。はるか遠い海原を超えて、才



スマン帝国からやってきた乗組員たち。

彼らはこうして故国へ無事に帰ることができたのでした……。

このエピソードから95年後のこと。

1985年イラン・イラク戦で、中東は緊張状態。イランの首都テヘランには215人の日本人が取り残されていました。

サダム・フセインは、イラン上空を飛行する航空機は、民間機であろうと無差別攻撃すると宣言

。

猶予は48時間です。

このとき日本は、危険すぎるということで、民間機、自衛隊機をテヘランに派遣できませんでした。代わりにとった苦肉の策が、トルコに日本人の救出を依頼する、というものでした。

空港にはすでに各国の救援機が、やってきては自国民を救出し、矢継ぎ早に飛び立って行きます

。

空港に残されたのは多くのトルコ人、そして日本人でした。



このとき、日本政府からの依頼を受けたトルコのオザル首相は、決断を迫られます。

イランにはまだ多くのトルコ人がいる。自国民を助けるべきか？ 日本人を助けるべきか？

と言う訳で……。

本作では、ふたつのエピソードを通じて、日本とトルコの友好関係、その絆を描いて行きます。

そのなかで、際立っているのは、明治に生きた、名もなき人々の「無私の行い」ということです

。

歴史家の磯田道史氏には「無私の日本人」という優れた著作があります。

実は、江戸時代からすでに、各藩の領民たち、土地の地主たちの中に「おおやけ」「公」の意識を持つ人たちが相当数いたことがわかるのです。

幕末、明治維新、近代国家への道。これらの流れは、全国各地で同時進行的に実にスムーズに達成されていきました。その要因の一つが、日本列島各地に、名もなき「おおやけ意識をもつ人たちが」「分散して」暮らしていたことにある、と私は思います。

本作ではその「おおやけの意識」を持つ、医師の田村元貞や佐藤村長、そして名もなき漁師たちの働きが感動的です。



ただ、これだけの感動的なエピソード、紛れもなく本作は「超大作」の骨格を持つ物語です。

それにしても、オスマントルコの軍艦や乗組員たちの描き方がいただけませんね。

これが本当に600名を乗せていた船なのか？と疑問に思うほど、あまりに小舟に見えてしまいます。また、国家の威信を背負って日本への旅について乗組員たち。

その役目は、国家元首である明治天皇への返礼、その親善儀式への出席にありました。

なのに、この大事な儀式は全く描かれておりません。

ゆえに、この作品において、はるばる大航海を行って、日本の国家元首に謁見する、という軍人たちにとっては極めて「名誉ある任務」の重大さが、いまいち観客に伝わってこなかったのが、やや残念ではありました。

ただ、国や、人種の違いを乗り越え、更には時代さえも乗り越えた、トルコと日本の友情関係。これは世界史の中でも、極めて珍しい出来事ではないでしょうか。

本作のエンдрールはぜひ最後までご覧ください。トルコからの親善メッセージがございます。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 田中光敏

主演 内野聖陽、ケナン・エジェ、忽那汐里

製作 2015年 日本・トルコ合作

上映時間 132分

[「海難1890」予告編映像](#)はこちら

2016・3月号 映画に宛てたラブレター

<http://p.booklog.jp/book/104688>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/104688>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/104688>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ